【42】

氏　名（国籍）	林（りん）　明（めい）煌（こう）（台　湾）
学位の種類	博　士（教　育　学）
学位記番号	博　甲　第　2482　号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	台湾の高等学校における日本語教育のカリキュラム開発に関する研究 —NBCD（Needs-Based Curriculum Development）の視点から—

主　査	筑波大学教授		山口　満
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	桑原　隆
副　査	筑波大学助教授	博士（教育学）	塚田泰彦
副　査	筑波大学助教授		嶺井明子
副　査	筑波大学助教授	教育学博士	清水　諭

論文の内容の要旨

1．論文の構成

本論文は，序章，第1章～第5章，終章から構成されており，ページ数からみると，500ページ（1ページ当たり1,200字。400字詰め原稿用紙で1,500枚に相当する）から成っている。

2．論文の内容

台湾では，1995年に「課程標準」（我が国の「学習指導要領」に相当する）が改訂され，高等学校における第二外国語として，従来のドイツ語，フランス語に加えて，日本語を選択履修することができるようになった。その結果，1997年から，日本語教育が実施されており，2000年現在では，普通高校で約3,000人，職業高校を加えると約10,000人の生徒が，日本語を履修している。ところが，その半数以上の生徒が途中で日本語の履修を放棄してしまうという実態が見られる。

本論文の「序章　問題の所在」では，こうした問題状況の存在が指摘され，次いで，その根本的な原因が，台湾の日本語教育研究における「溝通教学法」（Communicative approach）のとらえ方が極めて狭く，限られたものになっていること，「カリキュラム開発」の概念を日本語教育に取り入れることの重要性が認識されていないこと，とりわけその中心的な開発方法として注目を集めてきている「NBCD（Needs-Based Curriculum Development）」に関する理論的，実践的研究が決定的に不足していることに求められることが，指摘される。

こうした問題状況の改善を図るために，本研究では，以下のような5つの課題が設定されている。第1は，台湾における日本語教育のカリキュラム開発をめぐる問題点の所在を改めて明らかにするため，広く採用されている「コース・デザイン」と「カリキュラム開発」との異同などの問題について検討することである（第1章）。第2は，1970年代初頭以降のNBCDの歴史的な展開課程を整理，考察し，NBCDの理論的な基盤や今日の到達点を明らかにするということである（第2章）。第3は，自律的学習能力を育てるという観点からみた，そして台湾の高等学校の実状や利用できるリソースを考慮に入れた日本語教育のためのNBCDの枠組みを作成するということである（第3章）。第4は，台湾の高等学校における日本語教育のカリキュラム開発に求められる適切なニーズ概念を検討，分析し，著者自ら考案したニーズ分析の仕組みに基づいて，日本語カリキュラムの開発に必要なニー

ズの内容を明らかにするということである（第4章）。第5は，生徒の学習ニーズを実際のカリキュラム開発に生かし，実践的にカリキュラム開発を繰り返すことによって，外国語教育としての日本語教育のカリキュラム開発に合った適切なNBCDの方法を提案するということである。（第5章）。

研究の方法としては，歴史的な分析の方法，理論的な分析の方法及び台湾の高等学校をフィールドにしたアンケート調査や聞き取り調査，著者自らによる実験的な授業の実施による実証的な方法がとられている。

各章の概要は，以下の通りである。

第1章では，台湾の高等学校における日本語教育のカリキュラム開発をめぐる問題点が，次のような3つの観点から明らかにされている。第1は，日本語のカリキュラム研究に「カリキュラム開発」という概念を導入することの意味や重要性が正しく認識されていないということである。「コース・デザイン」という概念が専ら教材論と教授法という限られた狭い問題に重きを置くカリキュラム研究の方法をあらわすものとして使われており，計画，実施，評価・改善というダイナミックな一連の意思決定のプロセスを指し，潜在的かつ顕在的なカリキュラムの両方を含み，他教科との連携や多様な制約を考慮する「カリキュラム開発」という考え方と手法を導入することが急務である，としている。第2は，「課程標準」には開発の視点が示されていないこと，教員養成や研修の体制が整えられていないことなど，日本語教育をめぐる政策や行政上の問題点ということである。第3は，日本語教師と生徒を対象にした調査結果によれば，教師は専ら自分の経験と直感に基づいてカリキュラムを開発しており，教師によって作成されたカリキュラムと生徒が期待しているカリキュラムとの間には大きなギャップがあり，そのことが半数以上の生徒が日本語の履修を途中で放棄してしまう原因になっている。生徒のニーズを考慮することの重要性が明らかにされている。

第2章では，外国語教育および日本語教育におけるNBCDの理論的基盤と歴史的な変遷，展開が明らかにされている。NBCDの理論的基盤は，再構成主義（Reconstructionism）にあり，Tyler, R. W. の開発原理に基づいたTaba, H. の開発モデルを模倣して展開されてきたものである。しかし，開発の意志決定者が年代によって異なり，70年代の専門家（言語学者）中心→80年代の教師中心→90年代の生徒中心というように変わってきた。それとともに，開発の範疇がシラバス開発からカリキュラム開発へと変化してきた。

第3章では，90年代におけるNBCDを参考にして，教師と生徒の学習相談による合理的なNBCDのモデルが提示されている。それは，教師がニーズ分析によって生徒に共通する学習ニーズを把握し，それに基づいて先行カリキュラムを開発する。そして，この先行カリキュラムによって授業を展開する過程で，生徒との相談・交渉を通して変化しつつある生徒の新しい学習ニーズを明確に把握し，それらに基づいて合理的に先行カリキュラムを修正する。また，生徒が先行カリキュラムに対応して自ら個人カリキュラムを作成し，それに従って自律的・自主的に学習することができるような学習タスクが提供される。さらに，カリキュラムの展開中では，教師との学習相談を利用して，自分の学習ニーズを再確認し，また新しく見つけ，合理的に個人カリキュラムを修正して行く。最後に，言語学習ストラテジーに関する指導を通して，自立的学習の重要性を生徒に納得させ，言語学習についての確信を変容させることが目指される。このように極めて合理的で，実践的な性格を持つNBCDモデルが考案されている。

第4章では，生徒1,024人，教師46人を対象にした2種類のアンケート調査によって明らかにされた生徒の日本語学習ニーズの分析が行われている。ニーズ調査・分析に当たっては，「要求」，「欠乏」，「ストラテジー」，「確信」という4つの柱が立てられている。その結果，生徒が持つ日本語学習のニーズは，学校，学科，性別によって異なり，また生徒の意識と教師の意識の間には，例えば生徒は学習ストラテジーを習得したいという強いニーズを持っているが，教師はそのことに気づいていないといったいくつかの重要な指摘が行われている。生徒が自分の日本語の学習過程を計画し，モニターし，評価するメタ認知ストラテジーを育てることができるようなカリキュラムを開発することの必要性が指摘されている。

第5章では，著者自身による日本語カリキュラム開発の実践的研究が行われている。そして，第3章で設定さ

れた開発モデルが実施可能で，効果を上げることができることを実証している。教師は，生徒との学習相談や交渉を通して生徒の多様で変化に富む学習ニーズを的確に把握することができるとともに，新しい学習ニーズを生徒に育てることができる。また，生徒のニーズの変化に対応して，先行カリキュラムを修正する。一方，生徒は教師との学習相談を通して，自ら新しいニーズを見つけ，自らの学習目標を計画し，修正し，多様な言語学習ストラテジーを用いて自律的，自主的に日本語学習を進めることができる。

終章では，要約と結論，それに基づく若干の提言を行っている。

審査の結果の要旨

台湾の高等学校における日本語教育のカリキュラム開発の在り方について，学習者のニーズに基礎をおくカリキュラム開発（NBCD）の理論に基づいて，理論的，実証的な解明を行ったものであり，研究テーマの意義，斬新な着想，しっかりした構想，理論と実証の整合性，手堅い研究の方法，研究の独創性など，高く評価される論文である。

特に次のような4つの理由に基づき，従来の研究には見られないオリジナルな特色を持ち，教育の学術的研究の向上に貢献するところが大きい研究の成果であると判断することができる。

(1) 台湾の高等学校における日本語教育に見られる深刻な問題状況を克服するために，カリキュラム開発，NBCDの本格的導入が必要であり，効果的であるとした着想の良さが評価される。そして，実証的課題に応える基礎的な研究であり，今日的な意義は大きい。

(2) 応用言語学分野で看過されてきたカリキュラム開発の視点から，NBCDの理論的な基盤，成立と展開を整理し，捉え直した点が高く評価される。カリキュラム開発研究の視点に立ったNBCDに関する数少ない本格的な研究の成果であり，学会に貢献するところが大きい。

(3) ニーズ概論と分析方法を整理し，自ら考案したニーズ分析の枠組みに基づいて，台湾の高校生の学習ニーズを明らかにした。その考え方と方法は，直接的には，台湾における日本語教育のためのカリキュラム開発に大きな貢献をすることができるが，間接的には，広く学校教育におけるさまざま分野のカリキュラム開発研究に応用することができる。

(4) 生徒の自律的学習能力を育てるための教師と生徒による学習相談によるNBCDのカリキュラム開発の実践的な枠組みを考案し，可能なことを実証した。先行カリキュラムと修正されたカリキュラム，教師の構想するカリキュラムと生徒の構想するカリキュラム，学級全体に共通するカリキュラムと生徒の個人カリキュラム，それらの間をつなぐ機能を果たすものとして，教師と生徒の「学習相談」を位置づけ，活用することが可能であり，効果的であることを実証したことは，本研究の独創的な点として高く評価される。

実験的な事例研究の数が少なく，期間も短いこと，生徒のニーズを構造的に，また価値的な判断に基づいて解釈し，取捨選択するための考え方や方法の検討が不十分であること，日本語の特質に基づくカリキュラム開発という視点からの検討が不十分であることなど，今後の勉学に期待したいところも多いが，前述のような点において，極めて学術性の高い優れた研究の成果であり，足りないところを補って余りある，高く評価されるべき内容を持っている。

台湾から留学して，ひたむきな努力を重ね，学会で発表し，学会誌での掲載を果たし，その集大成としての論文であることも，付け加えておきたい。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。